読売新聞（2020年3月28日）

解説

コロナも多様性の一つ

■養老孟司さんに聞く

新型コロナウイルスの猛威が止まらない。この事態をどう受け止めたらよいのか。『バカの壁』などで、未知なるもの、わからないものに心を開くことの大切さを訴えてきた解剖学者、養老孟司さん(82)に聞いた。（編集委員　鵜飼哲夫）

ようろう・たけし　1937年神奈川県生まれ。東京大医学部卒。東大名誉教授。著書に「唯脳論」「形を読む　生物の形態をめぐって」など多数。

はじめての経験

――今日のような拡散を予想していましたか。

養老　しばらくしたら収まると思っていたけれど、一気に広がったね。症状が軽いから広がるんですよ。

ウイルスは、生きた細胞がないと増えない。だから、ホストである人が死んでは困る。新型コロナの場合、感染しても風邪のような症状だけで治る人が今のところ多いので、知らないうちに人に感染させてしまう。

――おさえる手だては？

養老　ここまでくると、即効策はないでしょう。ただ、爆発的な患者急増は医療崩壊を起こすので、ワクチンができるまでいかに感染を遅らせるかが課題になる。

――中国や日本で問題になった時、欧米諸国は対岸の火事で、2月26日には、米国のトランプ大統領は、「取り組みが奏功し、米国民のリスクは非常に小さい」と発言しています。それが今や欧米でも猛威を振るう。なぜ、経験から学べなかったのか、不思議です。

養老　はじめての経験だからしょうがない。また、感染拡大は、国の習慣、文化の違いもあり、単純比較はできない。マスクの習慣があった日本と、なかった欧米。建築様式の違いやハグの習慣の有無もある。

それとイタリアでは、お年寄りとの同居が多く、家族全員が出入りするコモンルームがある家が多いという。こうした生活様式と感染との関わりもあるでしょう。でも、家の中でお年寄りが孤立したり、独居したりする国がハッピーかと言えば、そうではない。大流行の原因も対策も簡単にはわからないのが現状です。

欧米で感染拡大　日本と異なる習慣や文化

人ごとではない

――新型コロナの電子顕微鏡画像が紹介され、究明が進みつつあるように見えますが。

養老　みんな生き物を軽く見ているんだよ。そんな簡単じゃない。特にコロナウイルスのように微細なものは、構造はわかっても、人間にどう影響するかは未解明です。写真で見るコロナウイルスの大きさで、人間を描いたら、どのくらいになると思う？

――富士山ぐらい？

養老　とんでもない。もっと大きくて、とてもじゃないが情報を追いきれない。微細な対象を一瞬と調べたら周りがボケるんですよ。

――よく養老さんは、人間の目は外側に向いているから、人体の内側のことがよくわからないと言いますが、まさにそれですね。

養老　みんな、自分という人間のことがお留守になっている。その人間には、同じウイルスに感染しても体質や遺伝的にて亡くなるもいれば、元気な人もいるそれが生物多様性です。

――よく多様性の尊重が叫ばれますが、それは簡単なことではないですね。

養老　そもそも生物が色々あることを、多様性の一言ですますのがおかしいし、人間には都合がよくない新型コロナも多様性の一つ。登場してしまったからには、共存するしかない。だって自分の一部ですから。

――自分の一部？

養老　例えば、田んぼだって自分ですよ。なぜなら、そこで稲が育ち、米になり、それを食べて自分の体になるんだから。そうすると田んぼは将来の自分でしょ。

物質は循環しています。ですから、ウイルスだって、存在してしまったからには、もはや人ごとではない。

生き方を見直す

――どうしたらよいか。

養老　敵だから潰せという手になると、外出できず、人と会えず、経済は止まる。しかもいくら人工的に安全な環境をつくっても、自然は多様で絶えず変化するから、頭で考えたシステムでなんとかなると思わないほうがいい。

――武漢を封鎖した中国は成功したといえるのでしょうか？

養老　感染者がゼロになっていなければ再び広がる可能性はある。ゼロになったかは神様じゃないとわかりません。

ただ、世の中も自然も、思うにまかせぬものですから、起こったことはしょうがない。その結果をいかに利用し、生き方を見直すかで先行きは違ってくる。日本の敗戦経験と同じですよ。稲を丁寧に育てれば秋には収穫があるでしょう。それと同じで、まずは身のまわりにある自然を手入れして、住みやすい社会をつくることから始めたらどうでしょう。

――自分の一部？

養老　例えば、田んぼだって自分ですよ。なぜなら、そこで稲が育ち、米になり、それを食べて自分の体になるんだから。そうすると田んぼは将来の自分でしょ。

物質は循環しています。ですから、ウイルスだって、存在してしまったからには、もはや人ごとではない。

生き方を見直す